

奪衣婆と姥堂

仏教では、亡くなった人は、この世とあの世の境界線である三途の川を渡らなければなりません。川辺では恐ろしい奪衣婆が見張っていて、あの世へと渡る者の衣服を剥ぎ取ります。奪衣婆の仲間の鬼、懸衣翁が衣服を木に掛け、その者の罪の重さを計ります。

山寺へ続く石造りの道沿いにある姥堂には、印象的な奪衣婆像が安置されています。この堂は、上にある極楽と下にある地獄の間の象徴的な入口です。過去には、信者は服を脱ぎ、魂浄化の象徴として、山から滴り落ちてくる小川の水で身体を洗いました。彼らは服を奪衣婆に捧げ、新しい服に着替えて上へ進みました。一歩上るごとに、世俗的罪と欲望がそぎ落とされていくと言われています。